三重大学教育学部研究紀要　第67巻　教育科学　（2016）　161 － 167頁

幼児の下品な笑いの発達

富田　昌平*・藤野　和也**

The development of the vulgar humor in preschoolers

Shohei TOMITA and Kazuya FUJINO

要　旨

幼児期における下品な笑いの発達について、2〜6歳児の親188名を対象に質問紙調査を行った。その結果、下品な笑いは男女共通に見られ、4歳から6歳にかけて多く見られることが示された。また、ギャグによる笑いは、流行のギャグをそのまま反復するだけであったが、下ネタによる笑いは、「おしり」「うんち」「おなら」などの単語と「フリフリ」「プー」「ブリッ」などのオノマトペとを結合させる、他者との対話を通して笑いを成立させるなど、子ども独自の生活世界から生み出されるユニークさを伴っていた。下品な笑いに対する親の態度は、厳格か寛容かで分けられたが、親がどちらの意見を持つかに年齢や性別による違いは見られず、どこまで許せるかという程度の差こそあるものの、その具体的な対応や指針は基本的には同様であった。以上の結果は、4、5歳児期における自己意識と仲間関係の発達という観点から考察された。

【キーワード】 下品な笑い、下ネタ、ギャグ、親の態度、幼児

問題と目的

幼児の日々の遊びや生活を観察していると、彼らが「おしり」「うんち」「おなら」「ちんちん」など排泄や性に関する言葉、いわゆる「下ネタ」を口にしてはゲラゲラと笑い合う姿や、お笑い芸人や漫画、アニメのキャラクターによる決まり文句、いわゆる「ギャグ」を口にしては相手の笑いを誘う姿をよく目にする。これらの多くは幼児期の子どもを持つ親にとってはできるだけ避けたい、あるいは禁止したい言葉であり、そのため、子どもがそうした言葉を人前で話した場合には、あからさまに困惑した表情や態度を示したり、厳しく叱ったりする親の姿もよく見かける。そして子どもはと言えば、そんな親の胸中などおかまいなしに、何とも楽しげな様子でその下ネタやギャグに興じている場合が多い。

奥田（1988）は、幼児期に見られるユーモアを言葉によるものと行動によるものとに分類している。その中で、この種の笑いに該当すると考えられるものとして、「排泄や性に関するもの」「おどけた格好をすること」を挙げている。また、平井・山田（1989）は、幼児のおどけ・ふざけ行動を観察し、特に頻繁に見られる行動として17種類を挙げている。そのうち、「身体の部位に関する言葉を使う」「排泄物に関する言葉を使う」は下ネタによる笑いに、「故意に滑稽な話し方や歌い方をする」「滑稽な顔をする」はギャグによる笑いに大よそ該当するものと思われる。さらに、田爪（1996）は、幼稚園年長児のユーモア発言を観察した結果、最も多く見られたユーモアは排泄や性に関するものであったと報告している。

このように、この種の笑いは幼児期において特徴的な笑いの1つであると考えられるが、なぜ幼児はこの種の笑いを好み、禁止されてもあえて口にしたがるのであろうか。また、この種の笑いはいつ頃発生し、その後どのような推移をたどるのであろうか。こうした問いに答えることは、幼児期の発達についてより深く理解する上でも重要であると思われる。よって、本研究では、この種の下ネタやギャグによる笑いを研究対象として取り上げることとする。なお、この種の笑いは一般的に低俗な笑いとされ、周囲から忌み嫌われるケースが多いことから、本研究では「下品な笑い」と総称して呼ぶこととする。

* 幼児教育講座
** 蓮昌寺保育園

先ず、なぜ幼児は下品な笑いを好むのであろうか。この点について考える前に、幼児はそもそも排泄物や排泄行為を「汚い」「恥ずかしい」ものと認識しているのかについて考えておく必要がある。本田（1987）は、子どもは幼ければ幼いほど分泌物や排泄物に対して忌避感を抱くことがなく、むしろそれらに執着し、楽しげにそれらを弄ぶことをすると述べている。また、Fraiberg（1959）は、トイレット・トレーニングの初期段階において、子どもは自分の排泄物に興味を示し、全く決まり悪さを感じていないと述べている。排泄の訓練を行い、それをコントロールできるようになるに従って、排泄物や排泄行為は彼らにとって「汚い」「恥ずかしい」ものへと変化していくのである。さらに、友定（1977）は、排泄のコントロールは子どもにとって自立の第一歩であり、いったんコントロールされた後には、排泄物や排泄行為は自分を低い次元に引き戻そうとする力を持つがゆえに、恥ずかしいものになると述べている。以上から、子どもは最初から排泄物や排泄行為を「汚い」「恥ずかしい」ものと認識しているわけではなく、それらは排泄のコントロールを境に獲得されるものであることが示唆された。

排泄行為や排泄物は「汚い」「恥ずかしい」ものであり、隠すべきタブーの事柄であると認識した上で、幼児はあえてそれらの言葉を口にするようになるわけであるが、それはいったいなぜなのであろうか。この点について、Cohen & Rudolph（1984）は、子どもはそのような言葉が聞き手にショックを与えることを知っており、その反応を仲間と一緒に面白がっているのだと述べ、また、Brazelton（1983）は、子どもは大人に対する言語的挑発行為としてその種の悪い言葉を用いるのであり、周囲の大人が慌てるのを面白がっているのだと述べている。さらに、奥田（1988）は、子どもは大人に期待されていることや真実が何であるかを知っており、故に、それを確かめるために逆のこと、つまり、大人によって禁止されていることをしたがるのではないかと述べている。

しかし、こうした説明は、子どもと大人との関係については当てはまるが、子ども同士の関係については当てはまらないのではなかろうか。なぜなら、子どもはその種の言葉を聞いたとしても、大人のように慌てたりショックを受けたりしないからである。子ども同士で見られる下品な笑いの発生理由について理解するためには、別の説明が必要となるが、その点において友定（1993）は興味深い考察を行っている。友定によると、子どもは3歳頃になると「おかしさ」に基づく笑いを楽しむことができるようになる。そして4歳頃になると、さらにその「おかしさ」を友達と共有し、笑い合うことを楽しむようになる。4歳児はこの時期、友達同士で笑い合うことによって仲間意識を少しずつ高めていくが、ここで問題なのは、人を笑わせるために「おかしさ」を作り出すことはそう簡単ではないということである。「おかしさ」を作り出すには、目の前で起こっていることとの間に何らかの形で「ずれ」を作り出す必要がある。例えば、普段と異なる行動をするとか、みんなと異なる行動をするとか、異なることを言うといったことが必要であり、しかもそれらが笑われる程度にコントロールされている必要がある（友定、1993）。ゆえに、自ら「おかしさ」を作り出して笑いをとることは4歳児にとって極めて難しい作業となるわけであるが、1つだけ手っ取り早く笑いが取れる方法がある。それが下品な笑い、すなわち下ネタやギャグによる笑いというわけである。

下ネタは、普段言ってはいけないようなタブーに触れる行為であるため、それだけで笑いが取れる。ギャグは、こうすれば笑いが取れるという芸の型を繰り返す行為であるため、これまた笑いが取れる。ともに「おかしさ」や「ずれ」について考える必要がないのである。こうして下品な笑いを言い合って互いに笑い合う状況を作ることで、4歳児は友達との間に親和的関係を樹立したり、確認したりするものと考えられる。さらに言えば、5歳児になるとこうした下品な笑いは次第に必要とされなくなる。なぜなら、5歳頃になると言語を駆使して自ら笑いを作り出すことができるようになるからである（友定、1993）。

こうした4歳頃から5、6歳頃にかけての発達的変化については、平井・山田（1989）も指摘するところである。平井はその著書『子どものユーモア：おどけ・ふざけの心理』の冒頭で、自身の孫の4歳時点と6歳時点での違いについて触れ、次のように述べている。「何とはなしに興味を持っていたのが、昼食（弁当）のときになると、『おならプー』『おしり』『おへそ』などの言葉を持ち出しては、楽しそうに笑う子どもたちがいることである。多くは4歳児である。……私が家にいるときに、幼稚園から帰ってきた彼は、私の顔を見るや否や、『ブラブラちんこのソーセージ』と大声で言って笑った。私も彼の笑顔に呼応して、同じ言葉を合唱した。……それから2年半たったとき、つまり彼が6歳10ヶ月になったときに、私の部屋に入ってきた彼の顔を見た途端、私は『ブラブラちんこ』が彼の意識の中でどのような位置づけを持っているかを知りたくなった。そこで、大声で『ブラブラちんこのソーセージ』と叫んでみた。すると彼は、おじいちゃんの顔をチラッと見て、つまらないことを言っているな――といった表情をしただけで、全く応じようとしなかった。私はこの時、発達の本質を教えられたのである」（p.i-ii）と述べている。逸話的な事例に過ぎな

いが、友定による仮説を支持する興味深い事例であると言えよう。

長年にわたる幼児の笑いの観察を通して得られた友定（1993）による考察は極めて明快なものであり、下品な笑いはいつ頃発生し、そのような発達的推移をたどるのかという本研究の疑問にも応えるものである。しかし、友定による考察は、きめ細かな観察を通して得られたものではあるものの、客観的な数量的データによって裏付けされたものではなく、そのため実証的なデータによる補強が必要であると考えられる。

そこで本研究では、幼児期における下品な笑いとその発達について検討することを目的とする。具体的には、幼児の親を対象に質問紙調査を実施し、2 歳から 6 歳にかけての各時期における下品な笑いの発生頻度や開始・終了時期、具体的内容などについて尋ねる。それにより、下品な笑いは幼児期においてどの程度見られ、それらはいつ頃から見られ始め、いつ頃にピークを迎え、そして沈静化していくのかについて明らかにする。併せて、下品な笑いに対する親の態度についても尋ね、幼児による下品な笑いを取り巻く状況についても明らかにする。

方　法

被調査者

K 市内の保育園 2 園に在籍する 2 歳児クラスから 5 歳児クラスの幼児 188 名（男児 96 名、女児 92 名）の親が対象であった。内訳は、2 歳児クラス 47 名（男児 23 名、女児 24 名、平均年齢 2 歳 11 か月、年齢範囲 2 歳 4 か月〜3 歳 6 か月）、3 歳児クラス 48 名（男児 24 名、女児 24 名、平均年齢 3 歳 11 か月、年齢範囲 3 歳 7 か月〜4 歳 6 か月）、4 歳児クラス 46 名（男児 24 名、女児 22 名、平均年齢 4 歳 11 か月、年齢範囲 4 歳 7 か月〜5 歳 6 か月）、5 歳児クラス 47 名（男児 25 名、女児 22 名、平均年齢 5 歳 11 か月、年齢範囲 5 歳 7 か月〜6 歳 5 か月）であった。

手続きと質問項目

質問紙は保育園長の了解を得た後に各クラス担任保育士を通じて幼児の親に配布し、2 週間後に回収した。調査時期は 2011 年 8 月から 12 月であった。

質問紙では、対象児の年齢、性別、きょうだい数、出生順位、在籍クラスについて尋ねた後、以下の質問を行った。

笑いの発生頻度：「『おしり』『おならぶー』『うんち』など下ネタを言ってよく笑う」「テレビのお笑い芸人のギャグなどをよくまねする」「人を笑わせることが好きである」「人前でおどけたりふざけたりをよくする」の 4 項目について、「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の 4 段階で評定を求めた。なお、人を笑わせる行為とおどけ・ふざけは下品な笑いではないが、比較対象とするために尋ねた。

下品な笑いの開始・終了時期と具体的内容：「お子さんは『おしり』『おならぶー』『うんち』など下ネタを言って大笑いするといったことがありますか」「お子さんはお笑い芸人のギャグを何度も繰り返し言って大笑いするといったことがありますか」の 2 項目について、「現在よくする」「現在たまにする」「過去よくする」「過去たまにする」「全くしない」のいずれかで回答を求めた。また、「現在よくする」「現在たまにする」と答えた場合には開始時期を尋ね、「過去よくする」「過去たまにする」と答えた場合には、開始時期と終了時期を尋ねた。さらに、その具体的内容について自由記述を求めた。

下品な笑いに対する親の態度：「あなたはお子さんが下ネタやギャグなどを言って笑うことをやめさせたいと思いますか」という質問について、「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の 4 段階で評定を求めた。また、「そう思う」「ややそう思う」と答えた場合には、「そうした笑いをやめさせたいと思うのはなぜですか。また、お子さんのそうした笑いに対してどのように対処をされていますか」と尋ねて自由記述を求め、「あまりそう思わない」「そう思わない」と答えた場合には、「そうした笑いをやめさせたいと思わないのはなぜですか。また、お子さんのそうした笑いに対してどのように対処をされていますか」と尋ねて自由記述を求めた。

結　果

下品な笑いの発生頻度

笑いの発生頻度に関して、下ネタ、ギャグ、人を笑わせる行為、おどけ・ふざけのそれぞれに「あてはまる」＝ 4 点、「ややあてはまる」＝ 3 点、「あまりあてはまらない」＝ 2 点、「あてはまらない」＝ 1 点で得点化し、年齢別及び男女別での平均値を算出した。Table 1 はその結果を示したものである。まず、下品な笑い（下ネタ、ギャグ）に関して、4（年齢）×2（性別）の分散分析を行ったところ、下ネタとギャグともに性別の主効果は見られなかったが、年齢の主効果に有意差が見られた（下ネタ $F(3,180)=3.22$, $p<.05$; ギャグ $F(3,179)=7.40$, $p<.001$）。テューキーの HSD による多重比較を行った結果、下ネタに関しては 4 歳児において他の年齢よりも有意に多く見られること、ギャグに関しては 4、5 歳児において 2、3 歳児よりも有意に多く見られることが示された。次に、

下品な笑い以外の笑い（人を笑わせる行為、おどけ・ふざけ）に関して、4（年齢）×2（性別）の分散分析を行ったところ、人を笑わせる行為とおどけ・ふざけともに年齢差は見られなかったが、性別の主効果に有意差が見られた（F（1,180）＝4.18, p＜.05; F（1,180）＝8.23, p＜.01）。おどけ・ふざけに関しては交互作用に有意差が見られた（F（3,180）＝2.80, p＜.05）。テューキーの HSD による多重比較を行った結果、人を笑わせる行為とおどけ・ふざけともに男児において女児よりも有意に多く見られることが示された。また、おどけふざけに関しては、5 歳児において男児は女児よりも有意に多く見られることが示された。

下品な笑いの経験の有無と開始・終了時期

下品な笑いの経験の有無に関して、「現在よくする」「現在たまにする」「過去よくする」「過去たまにする」「全くしない」のいずれかで回答を求めた。その結果、下ネタによる笑いの経験が全くないと回答した者は 8 名に過ぎず、残り 180 名（96%）は現在または過去における経験を報告した。また、ギャグによる笑いの経験が全くないと回答した者は 31 名であり、無回答であった 2 名を除く 155 名（82%）は現在または過去における経験を報告した。

次に、現在において経験があると回答した者に対しては開始時期を尋ね、過去において経験があると回答した者（下ネタ 23 名、ギャグ 29 名）に対しては開始時期と終了時期を尋ねた。その結果、Table 2 に示すような結果が得られた。各時期の前半とは 0 か月から 5 か月までを指し、後半とは 6 か月から 11 か月までを指す。出現度数は各時期の回答者数、出現率はそれらを対象児 188 名で除算した数値を示し、累積出現率は開始または終了時期の若い方から順に出現率を加算していった場合の数値を示している。下ネタに関しては、累積出現率が 3 歳後半の 64%から 4 歳前半には 86%と急激に伸びており、笑い自体は 2 歳前半から行われるようになるものの、とりわけこの時期から盛んに行われるようになることがうかがえる。また、開始時期の累積出現率から終了時期の累積出現率を減算した数値をその時期の実質的な出現率として産出すると、4 歳前半から 6 歳前半までの間で 81～84%の範囲と最も多いことが分かった。他方、ギャグに関しては、やはり累積出現率が 3 歳後半の 41%から 4 歳前半の 59%へと急激に伸びており、下ネタと同様に 2 歳前半からすでに見られるものの、とりわけこの時期から盛んに行われるようになることがうかがえる。また、開始時期の累積出現率から終了時期の累積出現率を減算した数値は、やはり 4 歳前半から 6 歳前半までの間で 51～52%の範囲と最も多かった。ただし、Table 2 に

Table 1　下ネタ、ギャグ、人を笑わせる行為、おどけ・ふざけの発生頻度に関する平均値

		2 歳児	3 歳児	4 歳児	5 歳児
下ネタ	男児	2.86	3.24	3.42	3.28
	女児	2.92	3.43	3.41	3.05
	全体	2.89	3.34	3.41	3.16
ギャグ	男児	2.45	2.68	3.17	3.28
	女児	2.24	2.70	3.18	2.82
	全体	2.35	2.69	3.18	3.05
人を笑わせる行為	男児	2.86	3.24	3.42	3.28
	女児	2.92	3.43	3.41	3.05
	全体	2.89	3.34	3.41	3.16
おどけ・ふざけ	男児	2.45	2.68	3.17	3.28
	女児	2.24	2.70	3.18	2.82
	全体	2.35	2.69	3.18	3.05

Table 2　下品な笑いの開始・終了時期

			2 歳		3 歳		4 歳		5 歳		6 歳	回答なし
			前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	
下ネタ	開始時期（n＝180）	出現度数	20	23	56	22	41	5	5	0	1	7
		出現率	11%	12%	30%	12%	22%	3%	3%	0%	1%	4%
		累積出現率	11%	23%	53%	64%	86%	89%	91%	91%	92%	96%
	終了時期（n＝23）	出現度数	0	0	3	0	6	1	5	1	1	6
		出現率	0%	0%	2%	0%	3%	1%	3%	1%	1%	3%
		累積出現率	0%	0%	2%	2%	5%	5%	8%	9%	9%	12%
ギャグ	開始時期（n＝155）	出現度数	9	14	42	13	32	4	8	0	0	33
		出現率	5%	7%	22%	7%	17%	2%	4%	0%	0%	18%
		累積出現率	5%	12%	35%	41%	59%	61%	65%	65%	65%	82%
	終了時期（n＝29）	出現度数	1	2	4	2	4	4	8	1	0	3
		出現率	1%	1%	2%	1%	2%	2%	4%	1%	0%	2%
		累積出現率	0%	2%	4%	5%	7%	9%	13%	14%	14%	15%

注．百分率は調査対象児 188 名を母数とした数値を示す。

示されるように「回答なし」の者もいくつか見られ、その点でこの結果は慎重に扱う必要があろう。

下品な笑いの具体的内容

下品な笑いの具体的内容に関しては、下ネタでは180名中82名から記述が得られ、ギャグでは155名中82名から記述が得られた。下ネタに関する回答は、①おしり（例：おしり、おしりフリフリ、おしりペンペン、おしりプリッ、おしりマン／自分のおしりを出す・見せる、おしりを出して「プリプリ」「桃だよー」と言う）、②うんち（例：うんち、うんちブリブリ、うんちブリブリざえもん、うんちプリッ、うんちっちー、「パパうんち行ってらっしゃい」、「それってうんちじゃろ？」と何にでも言う）、③おなら（例：おなら、おならプー、おならが出た・出る、プーデル、「今おならしたじゃろー！」と言って大はしゃぎする）、④おしっこ（例：おしっこ、おしっこジャー、ままごとで「ごはんください」と言うと「はい、おしっこ」と言って笑う）、⑤おっぱい（例：おっぱい、「おっぱいぱいぱいごめんなさい」）、⑥その他（例：かんちょう、意味不明な言葉で爆笑、語呂合わせのようなリズム感を持った組み合わせの下ネタ）の6つのカテゴリーに分類された。1名につき複数の回答が得られたため、分類は排他的ではなかった。82名を母数とした出現率は、順に56%、44%、29%、16%、 9%、10%であった。多くは排泄物や身体部位に関する言葉をそのまま発する「単語型」（45%）であったが、「フリフリ」「プリッ」「プー」「ブー」「ジャー」などオノマトペと結合させて発する「結合型」（39%）も多く見られた。また、「うんちとおしっこどっちが強い？」と尋ねる、ままごとで「何つくってるの？」と聞くと「うんち」と答える、「ごはんください」と言うと「はい、おしっこ」と言って笑うなど、他者とのやりとりを通して成立する「対話型」（5%）もわずかであるが見られた。ギャグに関する回答は、①楽しんご（例：ドドスコスコスコ、ラブ注入）、②小島よしお（例：そんなの関係ねぇ、オッパッピー）、③志村けん（例：アイーン、変なおじさん、バカ殿）、④あやまんJAPAN（例：ぽいぽいぽいぽぽいぽいぽぴー）、⑤兄姉のマネ、⑥その他（例：流行のお笑い芸人・ギャグ、ビートたけし「コマネチ」、はんにゃの金田、ザブングル、クレヨンしんちゃん）の6つのカテゴリーに分類された。82名を母数とした出現率は、順に65%、43%、10%、4%、4%、20%であった。下ネタのような独自のバリエーションは見られず、多くは調査当時に流行していたお笑い芸人のギャグであった。

下品な笑いに対する親の態度

子どもの下品な笑いに対する親の態度（やめさせたいと思うかどうか）に関して、「そう思う」＝1点、「ややそう思う」＝2点、「あまりそう思わない」＝3点、「そう思わない」＝4点で得点化し、年齢別及び男女別での平均値を算出した。Table 3はその結果を示したものである。4（年齢）×2（性別）の分散分析を行ったところ、いずれも有意差は見られなかった（F（3,174）＝.36, *n.s.*）。

Table 3　下品な笑いに対する親の態度に関する年齢別・性別の平均値

	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
男児	2.62	2.79	2.91	2.88
女児	2.61	2.87	2.81	2.64

各回答の出現度数に着目すると、「そう思う」8名（4.3%）、「ややそう思う」56名（29.8%）、「あまりそう思わない」88名（46.8%）、「そう思わない」30名（16.0%）、無回答6名（3.2%）であった。無回答を除外して、「そう思う」または「ややそう思う」と回答した者を厳格型（64名）、「あまりそう思わない」または「そう思わない」と回答した者を寛容型（118名）として分類し、各回答の理由と具体的な対応・指針に関する回答を分析した。厳格型では64名中60名、寛容型では118名中117名から回答が得られ、分析の対象とした。Table 4は厳格型によるやめさせたいと思う理由と具体的な対応・指針を示したものであり、Table 5は寛容型によるやめさせなくてもよいと思う理由と具体的な対応・指針を示したものである。1名につき複数の回答が得られたため、分類は排他的ではなかった。

厳格型によるやめさせたいと思う理由は、Table 4に示すように9つのカテゴリーに分類された。下品な笑いを恥ずかしい、不愉快、迷惑と捉える意見が最も多く見られ、次いで、面白くない、しつこいなどの意見が見られた。その他、女の子は下品なことをするべきではないといったジェンダーと関わる意見も見られた。具体的な対応・指針は、10のカテゴリーに分類された。やめるように注意する、やめるように促すといった意見が最も多く見られたが、状況や内容によってはよいという意見もあり、親も常に厳格な態度を示すわけではなく、柔軟に対応していることがうかがえた。その他、あえて聞き流すや放っておくという意見も見られた

また、寛容型によるやめさせなくてもよいと思う理由は、Table 5に示すように12のカテゴリーに分類された。下品な笑いは誰もが通る道であり、時が来ればやらなくなるという発達理解は、寛容型の親の多くの共通した意見であった。その他には、笑いの効用そのものに目を向けた意見や、笑いによるカタルシス効

Table 4　厳格型によるやめさせたいと思う理由と具体的な対応・指針（n＝60）

	カテゴリー	人数（%）
やめさせたいと思う理由	恥ずかしいから	14（23）
	周りを不愉快にさせる・迷惑になるから	9（15）
	場所をわきまえないから	5（8）
	女の子だから	5（8）
	面白くないから	4（7）
	下品だから	4（7）
	しつこいから	2（3）
	大人になった時に困るから	1（2）
	女の子に嫌われるから	1（2）
具体的な対応・指針	やめるように注意する	12（20）
	家や園ではよいけど外ではダメ	7（12）
	ギャグはよいけど下ネタはダメ	7（12）
	一緒になって笑わない・相手をしない・聞き流す	6（10）
	自然に言わなくなるので絶対ダメとは言わない	4（7）
	TPO を知らせる	3（5）
	なぜダメなのか理由を説明する	3（5）
	自分がされたらどうかを考えさせる	1（2）
	しつこいのはよくないと伝える	1（2）
	特に何も言わない	1（2）

注．百分率は記述した 60 名を母数とした数値を示す。

Table 5　寛容型によるやめさせなくてもよいと思う理由と具体的な対応・指針（n＝117）

	カテゴリー	人数（%）
やめさせたいと思わない理由	いつかやめる時が来るから	53（45）
	発達の中で自然なことだから	19（16）
	楽しそうだから	11（9）
	笑うことはよいことだから	10（9）
	コミュニケーションの 1 つだから	4（3）
	自分もそうだったから	3（3）
	無理にやめさせようとすると別に弊害が起こるから	2（2）
	やめさせるのは不可能だから	2（2）
	他人を楽しませたいという思いからだから	2（2）
	一緒に笑い合えるから	2（2）
	本人の自由だから	2（2）
	ストレス発散になるから	1（1）
具体的な対応・指針	一緒に楽しんでいる	17（15）
	度が過ぎると注意する	15（13）
	TPO に応じて注意する	14（12）
	人前で言っている場合は注意する	14（12）
	反応すると調子に乗るので聞き流す	12（10）
	特に何もしていない	6（5）
	人に迷惑をかけるような場合には注意する	5（4）
	たまに注意するがあまり気にならない	5（4）

注．百分率は記述した 117 名を母数とした数値を示す。

果、コミュニケーション能力の向上、個人の自由の問題などの意見が見られた。具体的な対応及び指針は、8 つのカテゴリーに分類された。一緒に楽しむという意見を除くと、どこまで許せるかという程度の差こそあるものの、基本的には厳格型と対応や指針は同様であった。

考　察

本研究では、幼児期における下品な笑いの発達について、幼児の親を対象とした質問紙調査により検討した。結果は以下の 4 点にまとめることができる。①下ネタやギャグによる下品な笑いは、人を笑わせる行為やおどけ・ふざけとは異なって男女共通に見られ、4 歳以降に大きく増加する傾向にあった。②下品な笑いは大多数の幼児に共通して見られ、早くて 2 歳前半に生じ、4 歳から 6 歳にかけてピークを迎えていた。③下ネタによる笑いは「おしり」「うんち」「おなら」など単語型の他に、「フリフリ」「プー」「ブリッ」などオノマトペを結合させる結合型や、おままごとで「何を作っているの？」と尋ねると「うんち」と答える対話型などが見られ、流行のギャグがそのまま反復されるギャグによる笑いとは異なり、子ども独自の生活世界から生み出されるユニークさを伴っていた。④下品な笑いに対する親の態度は、できればやめさせたいと考えている厳格型と無理にやめさせる必要はないと考えている寛容型とに分けられたが、親がどちらの意見を持つかに年齢や性別による違いは見られず、どこまで許せるかという程度の差こそあるものの、基本的には厳格型も寛容型も子どもに対する対応の仕方は同様であった。

以上のように、本研究の結果は、下品な笑いは 4 歳頃の子どもに最も多く見られ、5、6 歳頃になると徐々に沈静化していくという友定（1993）の考察から得られた本研究の仮説をほぼ支持するものであった。こうした発達をたどる理由としては、友定（1993）も指摘するように、4 歳頃になると友達を強く意識し、笑い合う状況を作り出すことによって友達との間に親和的

関係を築きたい、あるいは確認したいという、この時期特有の発達要求が子どもの中で生じてくることと無関係ではなかろう。友達と笑い合う状況を作り出したいものの、笑いをとるための知識も技術もまだ十分ではない4歳児にとって、下品な笑いは手っ取り早く笑いが取れる唯一の方法であり、ゆえにこの時期、こうした笑いが多く生じるようになるものと思われる。実際、先述のような姿が4、5歳の子どもにおいて多く確認されるようになることは、先行研究でも確認されている。例えば、西川（2003）は、特に男児において、4歳以前は自分のことを家でも外でも「○○ちゃん」「○○くん」と愛称で呼んでいた子どもが、4歳を過ぎると家では愛称で呼ぶが、外では「オレ」というように同年齢の仲間の前でいわば「勇ましい」姿を示すようになることを明らかにしている。このことは、4歳の彼らが友達を強く意識し、友達の前で自分がどのように見えるかを強く意識し始めたことの証左に他ならない。また、友達との間に親和的関係を築き、確認し合いたいという願いに関しては、中田（2004）の研究が挙げられる。彼は子どものじゃれる・じゃれ合うという行為に着目し、幼児期におけるその発生頻度を観察した結果、特に4歳児においてそうした行為が多く見られることを報告している。このことは、友達との間に親和的関係を築き、確認し合いたいと欲するものの、それを実現するだけの知識も技術もまだ十分ではない彼らが、手っ取り早い方法としてじゃれる・じゃれ合うという行為に頼っていると解釈することができよう。そして、それは下ネタやギャグによる下品な笑いに頼る姿と一致する姿である。

また、本研究の結果において、お笑い芸人やテレビの人気キャラクターによるギャグが特定の型の繰り返しに過ぎないのと比べて、下ネタは排泄や性に関するいくつかの特定の言葉を使用してはいるものの、その使用方法において単に単語を繰り返すだけではなく、その他の言葉と結合させたり、相手との対話の中で生じさせたりするなど、比較的自由度が高かったことが示された点は注目に値する。それは時代の変化と関わりなく子どもの生活の中で自然発生的に生じる笑いであり、その意味では「下品な笑い」と一括りにするのではなく、下ネタによる笑いとギャグによる笑いはやはり分けて論じるべきなのかもしれない。

最後に、本研究の限界と今後の課題について述べる。第1に、本研究では日々の生活における幼児の下品な笑いの頻度を集計したものの、それらは幼児の親を対象とした質問紙調査の結果に依拠したものであり、実際の彼らのそうした姿を集計したものではない。従って、今後の研究では組織的な観察調査によってさらに裏付けを得る必要があろう。第2に、本研究では下品な笑いの沈静化について5、6歳頃にその兆候を認めることができたものの、それは十分に本格化したものではなかった。従って、今後の研究では児童期以降の子どもも調査対象に含めて分析・考察を行っていく必要があろう。

付　記

本論文は、藤野和也による中国学園大学子ども学部2011年度卒業論文で得られたデータを再分析し、新たに論を展開したものです。調査にご協力いただいた保育園の先生方及び幼児の皆さんに深く感謝申し上げます。

文　献

Brazelton, T. B.（1983）. ブラゼルトンの1・2歳児をどう育てるか：自立期のこころと育児（森上史朗, 訳）. 東京：医歯薬出版株式会社.（Brazelton, T. B.（1974）. Toddlers and parents: A declaration of independence. MA: A Merloyd Lawrence Book.）

Cohen, D. H., & Rudolph, M.（1983）. 幼児教育の基礎理論（上巻）：幼児理解とクラスの経営（森上史朗, 訳）. 東京：教育出版.（Cohen, D. H., & Rudolph, M.（1977）. Kindergarten and early schooling. New Jersey: Prentice-Hall.）

Fraiberg, S.（1992）. 小さな魔術師：幼児期の心の発達（新装版）（詫摩武俊・高辻礼子, 訳）. 東京：金子書房.（Fraiberg, S.（1959）. The magic years. New York: Scribner and Sons.）

平井信義・山田まり子.（1989）. 子どものユーモア：おどけ・ふざけの心理. 東京：創元社.

本田和子.（1987）. 異文化としての子ども. 東京：紀伊國屋書店.

中田武.（2004）. 幼児期における「じゃれ合い遊び」の発生とその意味. 心理科学研究会2004年度秋の研究集会（遊び分科会）発表原稿（未公刊）.

西川由紀子.（2003）. 子どもの自称詞の使い分け：「オレ」という自称詞に着目して. 発達心理学研究, **14**（1）, 25－38.

奥田倫子.（1988）. 子どものユーモアに関する研究（その2）. 北陸学院短期大学紀要, **20**, 25－48.

田爪宏二.（1996）. 自由遊び場面における幼児のユーモア発言. 幼年教育研究年報, **18**, 95－100.

友定啓子.（1977）. 現象学的保育研究：「きたない」をめぐって. 本田和子ほか編, 保育現象の文化論的展開：人間現象としての保育研究3. 東京：光生館.

友定啓子.（1993）. 幼児の笑いと発達. 東京：勁草書房.